

1. コラム「論点提起」：花畑から考える農地のあり方や如何

お盆の折、熱い中、自宅近くにある「ひまわり畑」に孫を連れて観に行った。自らは田舎で育ったので、どの家にも庭先の隅っこ辺りでひまわりが咲いているのを見ていたので、改めて「ひまわり畑」なるものをみたいと思ったことはなかった。しかし、新聞の地方欄で案内されていたこともあり、孫には、見せておいたほうが良いだろうということで、「ひまわり畑」に連れていき、自らも初めて「ひまわり畑」なるものをみた。



このひまわり畑は、調べてみると、周辺地域の活性化のために始められたもので、8月のお盆頃が見頃で約2万本植えられているとのこと。畑の一部が駐車場になっているが、看板だけでなく、ナビできちんと位置登録ができる案内の工夫が欲しい。このひまわり畑は、小さな子供には一輪ずつ切ってくれる。帰りの車の中で、もらったひまわりに「青虫」が付いていて、「怖い」と云って大騒ぎになった。子供のときに、もっと自然（植物、虫等）に触れさせなければと思った次第。

「ひまわり畑」は関東だけでも「おすすめ」が少なくとも16箇所はあるらしい。全国ではいかほどか。

参考：関東近郊の絶景ひまわり畑おすすめ16選！2023年 <https://www.jalan.net/news/article/466803/>
「ひまわり」だけでなく、「ラベンダー」「チューリップ」「芝桜」さらには「菜の花」「ソバ」等々、最近は休耕地/耕作放棄地を利用して、観光スポットになっているところが結構ある。

参考：全国のおすすめ花畑85選！一面に絶景が広がる花の名所ガイド <https://tinyurl.com/28ggevfm>
そう云えば、昔は稲刈りが終わった田には緑肥のための「レンゲ畑」が普通にあり、よく遊んでいたのだが、化学肥料が普及してからはあまり見かけなくなった。そうした場所であそぶ者がいなくなった。それよりも、担い手不足による田畑の休耕地/耕作放棄地が進んだのかもしれない。

年々増え続ける耕作放棄等に「花を植える」ことは、「農地」としての維持にもなる。景観・観光効果だけでなく、セラピー効果等もある。花は「切り花」として出荷もできるし、「菜の花」や「ソバ」などは生産そのものとも云える。飼料用として「雑草」を育てれば、海外から輸入している飼料費の削減にもなる。非農家人に農地のあり方に関心を持ってもらうきっかけにもなる。

農水省は農地を守ると云いながら、農地は減り続けている。（参考：農地の保全及び有効利用に関する行政評価・監視結果報告書 平成25年4月 総務省行政評価局 <https://tinyurl.com/28f3mwxx>）建前-実態-仕組みのギャップが大きい。気候変動に加え、ロシアによるウクライナ侵攻以降、世界の食料・飼料環境は激変している。人の手が入らなくなった里山・里地、休耕地/耕作放棄地、担い手のいない農地等は当該環境を活かしながらももう少し自由に使えるようにすれば、多様な担い手が現れるのではなかろうか。それは、新たな農地空間活用型の「業」を励起する可能性がある。新たな仕組みへの転換がなされてこそ、農地・人が息づく未来が描けるが果たして変われるか如何。